教員からのメッセージ

「長生き」のすすめ

杉野　昭博

ベテランアスリートの活躍

スピードスケートの岡崎朋美選手が、2009年３月に女子500メートルで４年ぶりに自己ベストを更新したことが話題になった。37歳という年齢での自己ベスト更新が、驚きをもって受け止められたのである。プロテニスのクルム伊達公子選手も、1996年、26歳で引退した後、2008年にはやはり37歳で現役復帰を果たし、2009年には女子テニスツアーで13年ぶりの優勝を果たした。38歳での優勝は、女子テニスツアーの歴代２位の年長優勝記録だそうだ。

考えてみると、日本のスポーツ選手の現役寿命は確実に長くなっているような気がする。プロ野球では、阪神タイガースの金本選手、下柳選手、矢野選手の「41歳トリオ」が注目されてきたが、40歳を越えて現役を続けるプロ野球選手は珍しくなくなっている。野球よりも選手生命が短いと言われるサッカーでも三浦選手や中山選手など、40歳をこえた現役選手が誕生している。

スポーツ選手の選手寿命が長くなった要因には、トレーニングや栄養面など、科学的ケアの格段の進歩によって、選手の身体能力の維持管理が飛躍的に向上したこともあるだろう。しかし、私が興味をひかれるのは、ベテラン選手の多くが「まだ自分はうまくなれると思うので競技をやっていて楽しい」と語っていることである。

「生涯発達論」という考え方

人が発達や成長をするのは、幼児期から青年期までではなく、成人期や老年期においても発達し、成長を続けるのであるという考え方を「生涯発達論」という。発達心理学の分野では、人間の一生を「発達」としてとらえる考え方は古くからあったが、本当の意味で、「発達」や「成長」として彩られるのは、幼児期から青年期までで、成人期以降の段階は、「停滞」とか「老化」としてとらえられてきた。今日でも、成人期以降の発達研究の主流をしめているのは、「衰退や老化」への「適応」であって、中高年者が「本当に発達し成長するのだ」と考えている研究者はまれだろう。しかし、私は、最近、中高年者も「本当に発達する」と実感している。だからこそ、ベテランスポーツ選手の「若い時より、競技自体は今の方がずっとうまくなっている」という言葉に、私は大いに共感するのである。

そういう私も、正直に言えば、数年前までは「生涯発達論」などきれいごとだと思っていた。自分の周囲にいた老教授たちのなかには、年をとればとるほど、周囲が見えなくなって、ただ偉そうにふるまう人も少なくなかった。このような人々が「発達」しているなどとは考えられなかったし、「成長」の可能性すら感じられなかった。ところが、自分自身が53歳になってみると、どうも最近、自分は「発達成長」しているという実感がある。自分自身の「発達」をこれほど自覚的に認識したことは、少年期にもなかったのではないだろうか。恥ずかしながら、私は50歳を過ぎて、本当に賢くなったと感じているのだ。

私自身の生涯発達体験

私はもともと「思い込み」と「こだわり」が激しいタイプである。長年つきあいのあるＹ教授からは「いったん、これはこうやねんと思い込んだら絶対変えない」と指摘されてきた。「思い込み」と「こだわり」は、研究者にとっては長所にもなる。「思い込み」は、独創的な仮説をもたらすし、「こだわり」は緻密な検証や立論の原動力だろう。しかし、一般的な社会生活においては「思い込み」や「こだわり」は、おおいに支障をきたすことが多い。今ふりかえると、私の人生は、この「思い込み」や「こだわり」の強さのせいで、ずいぶんと社会関係の障害を抱えてきたような気がする。

ところが、ここ数年、自分でも自覚できるほど、「思い込み」や「こだわり」が弱くなっている。そのせいか、研究論文を書く時など緻密さに欠けるようなこともあるが、それを補ってあまりあるほど、対人関係や社会関係が飛躍的に向上し

ているのである。簡単に言えば、腹がたつことが少なくなっている。このことを友人で、自閉症児の親でもあるＯ教授に話したところ、「それは発達じゃなく、認知症が始まったんじゃないの」と言われた。そう言われればそうなのかとも思ったが、私は、「認知症」というのも、もしかすると「発達」としてとらえることができるのかもしれないと、ひそかに新たな「思い込み」を始めているのである。

忘れかけられた言葉
「この子らを世の光に」

牧里　毎治

金融をはじめとして情報や人材交流もグローバル化が進むなか、いや、国際化の名の下に地域社会や地場産業が破壊されていくからこそ、あえてローカルにこだわり、熱い視線を限界集落や過疎化していく住宅団地やインナーシティに注ぎたい。といっても地域福祉が専門領域なのだからコミュニティや地域共同体に強く関心をもつのは職業病の症候群のひとつにすぎないのかもしれない。

ここ３年ほど地元の豊中市での開催を皮切りに全国校区・小地域福祉活動サミットという自治会や町内会、地域密着型のNPOが集う住民主体の経験交流イベントを続けている。地域活性化や地域災害対応、認知症高齢者の支援、子育て支援、滞在外国人サポートなどなど玩具箱をひっくり返したような多彩なメニューをひっさげて北は北海道、南は沖縄から全国から駆けつけてくれる。それぞれの地域では孤高のまちづくり実践なのだろうか、年に１度のサミットは、日頃の鬱憤を晴らすように、さながらお祭り騒ぎの賑やかしさにあふれる。ここは参加者がお互いの取り組みを認めあい、支え合う劇場型空間なのだ。

昨年は、西宮市と宝塚市の地域福祉担当課と社会福祉協議会を中心に組織化した実行委員会が主催で関西学院大学Ｇ号館を会場に開催し、今年（2009年）は大津市で「あなたよし、わたしよし、地域よし」のテーマ・フレーズで２千人が大騒ぎの空騒ぎ大会になった。「三方良し」は近江商人の商いの原則を言い当てた言葉だが、市民社会のなかの企業のあり方を考えさせるフレーズでもある。滋賀の大津で開催するサミットだから、ご当地フレーズとしてはピッタリなコピーなのである。湖国滋賀は、環境問題を考えさせた先進県でもあるが、実は知る人ぞ知る、福祉の里でもあるのだ。

近江学園を開いた知的障害児者福祉のパイオニア、糸賀一雄が高らかに宣言した「この子らを世の光に」とういう語句は、社会福祉に携わる人、福祉関係者なら聖句のように知らない人はいない、と思っていた。大津のサミットに参加した人たちの幾人かが初めて聞いた、素晴らしい言葉だ、目が覚める思いだ、と感想アンケートに書いてくれていたのだが、私にはいささかショックだったのである。知ってるはずだと思いこんでいたものだから、特に若い学生たちの感想に多かったように思うが、社会福祉を専攻した若手の実践家にも初めて聞いたと感想を書いてくれたことに微妙な驚きを覚えたのである。

「この子らに世の光を」ではなく「この子らを世の光に」なのである。テニヲハが違うだけで指し示す意味がまったく異なってしまう良い例だとも思うが、まさに知的障害児者に世間の慈悲や恩恵をというのでなく、生まれながらに障害を負いながらも人として純粋さを失わないでいる知的障害児者こそ不正や悪徳にまみれた世間の人間の社会の鑑とすべきであると宣言したのである。重症心身障害児者であっても命ある人間として懸命に生きている、発達しようとしている、その小さなわずかな変化を見ずして福祉のヒューマニズムはあり得るのかと問い正しているようにも思える。

私たちはえてしてステレオタイプに外面的な判断で他人を決め付けてしまいがちである。障害や性別、年齢や出身地、そして国籍や民族性など一人ひとりへの眼差しを捨てて、他者を色分けしてしまう。こうして知的障害児者は社会から排除されてきた。精神障害者もハンセン氏病者も、在日外国籍者たちも多くのマイノリティは差別と偏見の眼に晒されてきた。今日的には認知症高齢者も社会から排除されかねない存在なのかもしれない。社会的排除は今も昔も変わらず存在し続けているのである。

人間のどのような小さな変化でも見逃さない、発達しようとする願いと成長しようとするささ